

世界で読めるヒロシマとナガサキ —LinguaHiroshimaのデータベース「多言語で読む広島・長崎文献」を巡って—

ウルシュラ・スティチェック

(日本人原爆作家の作品とその外国語訳に関する『県立広島大学人間文化学部紀要』
第11号と第12号に掲載された英文論の継続である。)

1. はじめに

我々のデータベースは、LinguaHiroshimaをインターネットで直ちに見つけられる。日本語の「リングアヒロシマ」というのは、「リングア」(lingua)がラテン語の「言語、ことば」の意味、我々の研究に最も相応しい単語である。ラテン語は古代から中世にかけて、国際言語として認められていた。私たちはグローバルの意味で、さらに中立的な立場に立ち、英語ではなく、このラテン語の言葉を選択した。そしてカタカナで表記されるヒロシマ・ナガサキは広い意味で原爆投下を指している。この二つのアイデアを、世界中どんな言語で、どんな場所で、どのような書物が読まれているかを調査した。つまり、日本語と外国語で出版された広島と長崎への原爆投下に関する文献の調査研究である。この調査を被爆70年の1年前、すなわち2014年から続けてきた。さらに、ヒロシマ・ナガサキが扱われる内容によって、様々なカテゴリーに分類している。我々のプロジェクトが「多言語で読む広島・長崎文献」と名付けた。LinguaHiroshimaのサイトで示すように「本研究は、ヒロシマ・ナガサキの体験を人類がどう共有してきたかについて俯瞰するための作業である。」

2018年8月の末現在、我々の研究の結果としては、およそ3500の文献が75言語で読めることある。現在は全てのデータをIT担当者や登録要員の努力と協力でデータベースに入力しているところである。2018年中に現在まで集めたすべての情報がWEBで公開される予定である。この作業は、今後も確実に続く。核兵器が世界に存在する限り、平和に関心を持つ世界中の著者が本を書き、出版し続けると予想されるからである。

本論の意図は、我々のプロジェクトの目的と誕生、構成と特徴、そして多言語の問題について論じる。次に著者の研究の焦点に絞って、日本人原爆作家の作品の外国語訳に関する調査研究の結果について述べる。最後に世界中にもっとも読まれてきた文献を著者の研究課題に焦点を絞って論じる。著者が研究する三つのカテゴリー(文学、児童文学、体験記・回想記)においては、翻訳の件数で比較すると、最も読まれている図書は児童文学の作品である。

2. データベースについて

2-1. 目的と由来

はじめに、我々のウェブ・サイトの紹介から引用する。「多言語で読める原爆文献データの提供は、被爆の実相を世界各地に浸透させ、ノーモアヒロシマ・ナガサキという普遍的概念の共有化に貢献できます。核兵器の廃絶へ一致しない混迷した世界状況の中、国家ではなく人間の安全保障を推進させる厚い市民層を形成することが当プロジェクトの目的です。読者の母語で、被爆の実相を草の根に届

けることの重要さは計り知れません。」これが私たちの主な目的である。地球上の人間は、多様な言語を使っている。核兵器の危険性に関する意識を高め、その知識を拡げるためには、自分の母語で本を読むことが最も効果的な方法である。いくら外国語で読書できるとしても、直接「心を奪う」のは母語である。この点を念頭に、我々のデータベースは、75の異なる言語で検索できる仕様にした。

2014年、戦後70年の1年前に、中村朋子（当時広島国際大学教授）と著者は、このプロジェクトを始めた。実は私たちは、十数年前から別々のアプローチで「原爆文学」あるいは「原爆文献」に関わったことがある。中村朋子は80年代から原爆投下の知識を世界中で英語文献を通して拡げてきた。さらに2003年に『英語で読む広島・長崎文献』という本を出版した。その中で、2002年までに発表された446点の文献を5つの分野に分けて、書誌情報を提供した。著者の場合は、原爆作家の原民喜の研究のために、日本に留学した。2000年頃、博士論文を書く途中、「原爆文学」という文学ジャンルの作品がどのような言語へ翻訳されたかと調査を始めた。数年後、2014年二人は連携し、同様な調査研究を開始した。このプロジェクトが十分時間があると期待して、作業を続けてきた。ところが、我々が思ったより、出版件数の多さや翻訳された言語の多様さに直面し、調査は2018年まで、つまり4年間かかった。ウェブ・サイトのデザインから、登録情報の管理まで、専門的なIT技術に関し、O'Kullに担当を委託した。英語の言語学者である中村朋子と日本の文学研究者である著者、この二人だけですべての調査をすることが不可能であると考えて、それぞれの言語のネイティブスピーカーや専門の研究者の協力を依頼した。現在の時点では、私たちのチームは、我々の二人の編集担当以外、米国財受の英文校正者 Nancy Meyer、日英校正とデータ入力の4人、各分野（医学、プロジェクト計画、文学と科学）の4人の監修者、さらに25言語30人の協力者で構成されている。ヨーロッパ諸語の場合は、協力者を見つけるのはそれほど難しくはなかった。例えば、フランス語、ハンガリー語、スウェーデン語あるいはイタリア語の担当者は、日本に滞在したり外国に居住したりしている。そして、社会主義時代（1989年まで）ポーランドに必須科目であったロシア語の知識の所為で、著者はスラブ系の言語の担当になった。

ところが、アジアの言語あるいは中東の言語の担当者を見つけることはかなり難しかった。例えば、アラビア語の責任者は『はだしのゲン』のアラビア語の翻訳者、カイロ大学文学部日本学科の教授 Maher Elsherbini、ペルシャ語は、広島女学院大学の卒業生、平和の活動家 Isooda Ajdari、インドネシア語は、広島大学文学の博士 Syahrur Marta、スリランカのシンハラ語は、この言語へ『はだしのゲン』を翻訳した仏教の僧侶 Thalangalle Somasiri、ラオ語の責任者は、英語の講師 Khankeo Inthavong である。大きな問題があったのはインドであった。多くの言語が公用語であるので、まとめたインド諸語の担当を、大阪大学大学院文学研究科の博士 Mohammad Moinuddin に依頼した。

2-2. 構造と特徴

元は5つのカテゴリーであった文献データベースを7つのカテゴリーに拡大して、現在は①文学、②児童文学、③体験記・回想記、④写真集・画集、⑤歴史と社会科学、⑥医学と⑦物理学と工学に分けている。収集した75言語で書かれたおよそ3500冊についての情報を様々な方法で検索することができる。基本的には他のデータベースと同様に、著者名あるいは題名で探すことができる。検索された図書を、さらに言語別、分野別、あるいは出版年代別で、情報を得ることができる。もう一つの方法として、キーワードで書物を検索することもできる。データベースの「特徴」と説明するサイトにある「詳細画面について」で以下の説明がある。「キーワード検索の結果、原著には“original”、翻訳版がある場合は“件数 translations”などの表示がタイトルの横に表示されています。本のタイトルをクリックすると、書誌情報を得ることができます。著者名、編集者名、翻訳者名、書名、出版地、

出版者、出版年に加えて、LinguaHiroshimaによる独自の注記があります。一次資料には、詳しい注記を掲載していますが、二次資料は、注記のない場合があります。」

このプロジェクトはヒロシマ・ナガサキに関するonline情報源としてはとても稀で、おそらく世界中最も大きい収集されたデータベースに違いない。中村朋子は4つのジャンル、つまり④写真集・画集、⑤歴史と社会科学、⑥医学と⑦物理学と工学の文献入力を担当であった。著者が担当した文学、児童文学、体験記・回想記の分野では、詩集や短編小説集に掲載した、広島・長崎をテーマにした作品をデータベースに入れた。

もう一つの特徴は広島・長崎の原爆投下に直接かかわる図書だけでなく、原子爆弾や核兵器を扱っている図書、すなわちビキニ環礁での実験を初め、チェルノブイリと福島に関する文献情報もある。文献は、広島と長崎がタイトルにある、または、原爆投下に関する章が含まれていることを転宅の基準にした。

日本語版については、他言語の出版とは異なり、翻訳版のない本は、含まれていない。原著が日本語で書かれ他言語に翻訳された本と、原著が日本語以外で書かれ日本語に翻訳された本に限定している。

著者が担当しているジャンルは①文学、②児童文学、③体験記・回想記である。「文学」とは小説、短編小説、詩、俳句、短歌、「児童文学」は漫画、それぞれの年齢に応じた児童小説、子供用の絵本、少年小説や教科書である。「体験記と回想記」は、日本人と外国人の被爆者としての証言、戦争直後広島と長崎を訪れた人々など、被爆者でない人々の証言、あるいは被爆者と接触した人々の記録、その後もこの都市を訪問した人々の感想などである。

このデータベースは、ローマ字を使用する利用者だけでなく、多種の文字、つまり日本語を初めとして、中国語、朝鮮語、ロシア語、アラビア語、タイ語、シンハラ語、インド諸語などを使用する利用者への配慮もした。それぞれの原語とそのローマ字読みを入力している。この件に関しては、著者名、編集者名、翻訳者名、書名、出版地、出版者を原語で書くように努力したが、まだこの作業は今後の課題である。

最後の特徴としては、注釈のことである。独自の注記を書くことを大前提にした。できるだけ一次資料を入手し、注記を書いた。その中には、中村朋子（2003年）で紹介した文献の注記も含まれている。

2-3. 多言語の問題点

著者は、文学研究だけでなく世界中の言語にも興味があるという訳で、このプロジェクトに加わって来た。小中高等学校で習ったロシア語とラテン語、ポーランドのワルシャワ大学で日本語を研究しながらドイツ語も習い、日本の大学で朝鮮語も習ったこともある。この知識は今回の研究に大変役に立った。75言語の図書が見つかった理由はその一つの原因であった。ところが、世界中の言語が分からないので、まだ我々は発見していない文献があるかも知れない。この点からも、この作業は終わらないかもしれないと思われる。

先に述べたように、ほとんどのヨーロッパ諸語はローマ字で表記されるので、原著を初めとして、これらに関するすべての作業、つまり読み取ること、理解すること、そして書き込むことには問題はなかった。同じように、アフリカの言語であるアフリカーンス語とスワヒリ語とかアジアのマレー語、インドネシア語、フィリピン語、トルコ語はローマ字で表記されるので、これも問題はなかった。ベトナム語はローマ字に分音符があるので、三つの作業は少し難しかった。

それから、キリル文字を使っているロシア以外の言語は、ヨーロッパのブルガリア、ウクライナ、旧ユーゴスラビアのセルビア語など、アジアのモンゴルあるいは旧ソ連の共和国であったウズベクと

キルギスである。幸いに、著者がキリル文字を理解ができるので、筆写の問題はほとんどなかった。ところが、ローマ字表記を使わない多くの言語の筆写にはいくつかの問題が起きた。例えば、ヘブライ語、ペルシャ語とアラビア語の場合は、右から左へ書くので、情報を入力することには問題があった。ビルマ語の文字がコンピュータには無いので、中々書けなかった。あるいはスリランカの友人を通してシンハラ語の文字を最近入力できた。さらに、ローマ字でないインドの諸語であるヒンズー語、ベンガル語、タミル語、マラーティー語（西インド）あるいは稀なマラヤーラム語（南西インド）の場合は、大阪大学の助教の助けで、入力することができた。インドとパキスタンで使われている諸語であるパンジャーブ語（インドとパキスタンの国境）、グジャラート語とウルドゥー語（インドとパキスタン）、トルワリ語（パキスタン）、それからアフガニスタンの諸語であるダリ語とパシュトー語の場合は、広島大学の留学生を援助で、入力することができた。中国語は、現在北京を中心に使われている簡体字中国語と台湾や広東省などで使われている繁体字中国語に分けて、入力した。

以上に述べた以外の珍しい言語と言え、ネパール語、カンボジアのクメール語、フィリピンに通用するビサヤ語（Visayan）、あるいはコーカサス諸語であるアヴァル語（Avar）である。もちろん、このような言語での出版は1・2点しかないが、我々の調査研究にとっては宝物のような発見である。

先に述べた言語がアジアで一般に通用しているが、現地の言語で書かれた原爆に関する知識を伝える本数はまだ十分とは言えない。ヨーロッパの場合は、興味深い言語学上の発見もあった。グリーンランドの言語であるカラーリスット語（Kalaallisut）、フェロー諸島（アイスランドとスコットランドの間）の言語であるフェロー語（Faroese）、また英国の言語であるウェールズ語、そしてもっとも地方の言語を大事にするスペインのカタロニア語（東のバルセロナ地方）、バスク語（北スペイン）あるいはガリシア語（北西）のことである。原爆に関する文献は非常に少ないが、言語学者にとって大いに価値のある発見である。

4年間かかったプロジェクトは世界中にいる多くの協力者の援助で一応完成に近い状況となったが、我々の作業は終わりそうもない。地球のすべての言語で届くまで、現在までに書かれたあらゆる書物を届けるまでは。

3. 文学・児童文学・体験記の翻訳に関して

まず、世界中に最も読まれている原爆に関する①、②と③のジャンル、つまり「文学」「児童文学」と「体験記・回想記」の文献¹の中から日本人作家が書いた作品の翻訳に注目する。

3.1 日本人作家の「原爆文学」－「被爆作家」と「非被爆作家」

ジャンル「文学」の場合は、どのような日本人作家が世界中でもっとも人気があるか、彼らのどんな作品が一番多く翻訳されるかと見てみよう。「原爆作家」を二つのカテゴリーに分離して、「被爆作家」と「非被爆作家」と名付けた。前者のグループの中で原民喜、峠三吉、栗原貞子、阿川弘之、林京子、大田洋子と正田篠枝の作品を調査した。後者のグループに次のような作家を含めた。井伏鱒二、井上ひさし、井上光晴、村井志摩子、小田実、大江健三郎と佐多稲子である。

「被爆作家」と言えば、必ず原民喜のことを考える。彼の詩と小説は22言語で読まれる。スウェーデン語では「水ヲ下サイ」というかなり有名な詩だけを読める。大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』の5章「屈伏しない人々」に「水ヲ下サイ」が入っている。この小説が9言語に翻訳された故に、原民喜の詩も訳された。彼の最も素晴らしい短編小説『夏の花』は14の言語で読まれている。ヨーロッパ諸語の中から珍しい言語とは、エスペラント、ハンガリー語、セルビア語、スロヴァキア語である。

この短編は1947年に出版され、すでに1953年にジョージ・サイトーによって英語へ翻訳され、アメリカで発表された。この訳はリチャード・マイニアが1990年に新しい訳を出版するまで様々の短篇集に発表された。ジョージ・サイトーの英訳の後に最も早かったのはロシア語が1961年に、ハンガリー語が1967年とポーランド語が1972年に発行されたが、最も遅かったのは2012年にスペイン語であった。それから朝鮮語や、中国語は21世紀に出た。原民喜の三部作、「壊滅の序曲」「夏の花」「廃墟から」がフランス語（1993年）、イタリア語（2010年）、そしてリチャード・マイニアによつての英訳（1990年）が発表された。三部作以外の短編「心願の国」の訳はたまにあるが、美的な価値のある作品であるので、さらに多く訳は必要である。人口の少ない国々であるハンガリー語（1967年）とセルビア語（2000年）の訳があるのは珍しい。著者は1995年にポーランド語に訳して、ワルシャワ大学日本学科 *Japonica* の紀要に掲載した。

最も有名な詩「碑銘」「コレガ人間ナノデス」あるいは「永遠のみどり」の英訳は数点ある。最初の「永遠のみどり」の英訳は大原三八雄によつてすでに1955年に『広島のうち』(*An Anthology. Japanese Poems together with English Versions*) で発行されたが、1957年に「コレガ人間ナノデス」の英訳がコウノ・イチロウとフクダ・リクタルウによつて『日本の現代詩集』で発表された。最新の英訳は、広島在住アメリカ詩人、アーサー・ビナードによつて2015年に『第二楽章。ヒロシマの風、長崎から』で出版された。著者は原民喜のすべての戦後詩集をポーランド語で2013年にクラクフのヤギェウォ大学の出版社から発表している。

原民喜の詩の英訳に限らず、日本人も英米もさまざまな試訳をしている。例えば、2007年に東京の出版社であるコールサック社は郡山直などの英訳を『原爆死一八一人集』(*Against Nuclear Weapons. A Collection of Poems by 181 Poets, 1945-2007*) として発行した。その中には「原爆作家」であった原民喜の詩だけでなく、もう一人の「被爆詩人」、**峠三吉**の詩の訳もある。峠の詩は**9つの言語**に訳されている。英語以外では、ドイツ語、フランス語、ロシア語があるが、スウェーデン語、チェコ語とアラビア語もある。ところが最も珍しい言語はインドの二つの言語、マラーティー語とヒンディー語である。この二つ言語で『原爆詩集』全体が訳されている。

栗原貞子が80年代にヨーロッパとハワイで活発な平和活動を続けたので、その頃に彼女の作品への関心は始まった。英語、ドイツ語、フランス語とロシア語以外はエスペラント語、フィンランド語、スロベニア語、アラビア語と朝鮮語という**9つの言語**で彼女が書いた詩を読める。最も多く外国語に訳されているのは「うましめんかな」である。さらに、栗原貞子が書きたいいくつかのエッセイは英語とドイツ語で読める。

その他の「被爆作家」を調べると、**阿川弘之**が書いた『魔の遺産』の英訳はすでに1957年に発表された。他の言語はチェコ語だけで、短編「年年歳歳」である。**林京子**の6つの短編小説が英訳で発表され、ロシア語で5つであった。その他の言語はチェコ語、ドイツ語、イタリア語とセルビア語である（**6つの言語**）。**大田洋子**の作品も**6つの言語**で読める。中国語、チェコ語、ドイツ語、ロシア語、セルビア語と英語である。**正田篠枝**は英語、ドイツ語とフランス語（**3つの言語**）である。

「非被爆作家」のうち、さらにヒロシマのテーマを扱った日本人作家の中で、最も有名なのは、**井伏鱒二**と彼の『黒い雨』である。**22の言語**で読むことができる。多くのヨーロッパ諸語の中でめったに訳がない言語はブルガリア語、オランダ語、フィンランド語、ハンガリー語、ノルウェー語、ポルトガル語、セルビア語とスウェーデン語である。さらに、その他の珍しい言語は、ペルシャ語、タイ語、ウルドゥー語、マレー語と中国語（簡体字）である。その他はチェコ語、イタリア語、韓国・朝鮮語、ポーランド語、フランス語、ドイツ語、ロシア語とスペイン語である。それぞれの翻訳の年を調べると、英訳は原本の2年後で、すでに1967年に、ドイツ語は1969年に、ポーランド語は1971年で

あった。それから、1951年に原語で出版された短編「かきつばた」の5つの訳が英語、チェコ語、ポーランド語、ドイツ語とセルビア語で出ている。

東京の井上事務所「こまつ座」は井上ひさしの『父と暮らせば』の6つの言語の訳を発表した。村井志摩子はヨーロッパ、特にチェコで活躍したので、彼女の『広島の子』を5つの言語で読める。既に述べた大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』が9つの言語、アラビア語、中国語、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、韓国語、ロシア語とスペイン語で読める。小田実の『HIROSHIMA』がアラビア語を含めて4つの言語で発表されたことを確認している。最後に、井上光晴と佐多稲子の短編小説は、主に大江健三郎の『何とも知れない未来に』という短篇集に収録され、このアンソロジーが様々な言語へ翻訳されたために、彼らの作品が有名になったのである。それぞれをチェコ語、英語、ドイツ語とセルビア語（4つの言語）で読める。

3-2. 最も多くの言語に翻訳された作品

「文学」のカテゴリーに属している日本人作家以外の作家たちの作品、あるいは②と③のカテゴリー、つまり「児童文学」と「体験記」の文献を分析しよう。これらには以上で述べた稀な言語の翻訳が多い。

二つのパターンが目立つ。日本語で書かれ外国語へ訳されて世界中人気になった図書、と外国語で書かれ世界中によく読まれている図書である。いくつかの例を見てみよう。丸木俊の『ひろしまのピカ』という「児童文学」の絵本は12言語に翻訳され、その中にはウェールズ語の訳がある。実はこれはウェールズ語でただ一つの原爆文献である。長田新の『原爆の子。広島の子。少年少女のうたえ』は「体験記」のジャンルに属して、大人向けの子供たちが書いた作文集である。この18言語の中には、例えばカラーリスト語あるいはスワヒリ語（この言語の唯一つの文献）など、稀少な言語による訳がある。

「児童文学」の中で、おそらく一番人気のある本は、中沢啓治の『はだしのゲン』である。日本で1973年に出版された漫画は、現時点で24言語に翻訳されている。一番早かったのは原著出版の5年後、つまり1978年にすでに英語版が出ている。いくつかの訳が80年代に出版されたⁱⁱ。しかし、不思議に思うのは、私たちが調べた限りドイツ語版の第一巻は1982年に出て、そして2004-5年の間に1-4巻が出て、それ以上出版されていない。多くの国で21世紀に入ってから漫画の翻訳が出た。形式を調べると、インドネシア語ではすでに1996-2013年の間に訳が刊行されたが、十巻でなく二十巻であった。さらに、ロシア語の『はだしのゲン』は独自の二つのチームによって訳された。一回目は1995-2001年に、二回目は2013-2016年であった。2015年から我々の協力者である Maher Elsherbini 教授はアラビア語でこの漫画を出版している。2018年の10月には第4巻の出版が発表された。すべてのヨーロッパ諸語、ペルシャ語、トルコ語以外では、珍しいシンハラ語で2巻が2015年に出た。モンゴル語（2012年）とラオ語（2014年）では一巻ずつの絵本が出版されている。

『はだしのゲン』は世界中の出版社を通して世界中に広がってきた。これに対し、現地広島のある絵本が地球の最も多い言語に訳されている。2003年にうみのしほによって書かれた『おりづるの旅。さだこの祈りをのせて』の絵本である。これは、ANTHiroshimaという小さなNGOの協力によって、現在おそらくもっとも多く翻訳されている「児童文学」の作品である。これは27言語の訳があり、主にアジアの非常に珍しい言語で訳されているⁱⁱⁱ。最近ではヨーロッパ諸語への翻訳にも力が入っている。

「体験記・回想記」というジャンルで最も多くの外国語に翻訳された本は、1955年の蜂谷道彦の『ヒロシマの日記』である。19言語のほとんどは、50年代に出版されたが、その後の出版は1977年にアラビア語、と2007年にスリランカのシンハラ語がある。

もう一人の「体験記」を書いた作家が特にヨーロッパ諸語によく訳された。これは1949年位出版された永井隆による『長崎の鐘』である。14言語の殆どが50年代に翻訳出版された。アジアにカトリック信者が増えてきたこともあり、インドネシア語とタイ語の本が最近発行された。

もう一つのパタンは、広島・長崎について外国人作家が書き、日本語を始め多くの外国語へ翻訳されたものである。「児童文学」のジャンルでカール・ブルックナーの『サダコ』^{iv}は最も人気のある図書である。1961年にドイツ語で書かれたこの本はオーストリアで出版され、直ちに60年代にヨーロッパで人気を得て、さらに、以前に述べた珍しい言語でも拡がった。1964年にアフリカンス語、1986年にフェロー語に直された。24言語の訳の中から、日本語訳が2000年にできた。

同じく50-60年代に活躍した作家エディタ・モリスは1959年に『ヒロシマの花』^vを書いて、60年代と70年代に19言語に訳された。日本語訳は1971年であった。

もう一人の作家を忘れてはいけない。彼はある意味で以上に述べた二つのパタンを併せ持っている。2017年にノーベル文学賞を受賞した日系イギリス人、カズオ・イシグロは1982年に英国に在住する長崎女性の回想を描いた『遠い山なみの光』^{vi}を英語で発表した。直ちにこの小説は多くのヨーロッパ諸語に翻訳され、原著出版後19年目の2001年に日本語が出た。合計18言語で読める。

以上に述べたパタンは多くあるが、私たちの調査研究で、たいへん稀なケースを発見した。日本語版もなく、英訳版もない若者向きの『広島少女』^{vii}という小説が1954年にロシア語で誕生した。作家、翻訳者ローマン・ニコウアイェヴィッチ・キームは朝鮮系ロシア人であり、1899年にロシア極東で生まれた。少年時代を日本で過ごし、1907年から1917年まで東京の学校へ通った。1923年にウラジオストク大学の東洋学科を卒業して、1930年まで日本文学と中国文学をモスクヴァ東洋学研究所で学んだ。その時に、極東の文学に関する様々な論文や記事を发表或したり、通訳者として働いたり、芥川龍之介の小説を翻訳したりした。30年代にKGBの職員として日本で働いたが、1937年に逮捕され、1940年に20年間の判決を受けた。戦争中囚人としてKGBのプロパガンダ局で通訳者として仕事を続けた。1945年に判決が短縮され、刑務所から解放されて、1959年に名誉を回復した。50年代から主に推理小説を書いたり、『日本の短編小説1945-1960』を編集したりした。その時、最初1954年に雑誌、その後1956年に単著として『広島少女』を出版した。1955年と1957年に中国語（別々の出版）、チェコ語、ドイツ語、ポーランド語とルーマニア語の訳が出た。さらに、1985年にベンガル語に訳された（6言語）。すなわち、限られた地域でしか読まない本である。なぜ日本語訳あるいは英訳がないのであろうか。冷戦時代であった50年代に書かれたこの小説は、戦争と原爆の社会的な結果を強く批判している本である。小説はスミコ、ヤエコと彼女らの若い仲間が8月6日当日に奇跡的に生きながらえた場面から始まる。その7年後の1952年頃に、彼らは「赤」という反戦運動に属して、反戦ピラを散ったり、壁に貼ったりして、戦争や核兵器に反対する。主人公のスミコは広島を占領する米軍とも接触する。被爆者となり、原爆傷害調査委員会（ABCC）の患者として調査観察される。少年小説でありながら、冷戦のプロパガンダの部分が長く登場している。これ故に、50年代にその他の言語に訳されずに、現在まで忘れられたのであろうか。

三つのカテゴリーの中から最も多くの言語に翻訳された文献の種類と数を見ると、外国人作家と日本人作家共に「児童文学」で圧倒的に多い。こうした本は、次世代を担う子供たちを対象にしている。広島・長崎の悲劇についての教育を意図した著者の期待は大きい。文学作品の出版年を時系列で見ると、「原爆投下」というテーマは風化せずに現代の話題であることがわかる。一時期に様々な言語で翻訳出版された本が、その後暫くすると他の言語で出版される。おそらく、文学的な価値を認めての再出版ということもあるが、広島・長崎の悲劇は現実的なテーマである。

終わりに

我々の調査研究は簡単には終われない。平和と戦争、核兵器の廃絶、原爆による苦しみ、人間の怒り、絶望などの感情を問題にする人々はヒロシマ・ナガサキについての本を書き続けるのであろう。LinguaHiroshimaはこのデータを集めて、なるべく多くの地球人にこの声を届けるよう今後も努力する。平和公園に燃えている炎が無くなるまでに、広島と長崎の悲劇的なイメージを無くすまでに、我々の使命は続く。

注

- i 著者が担当している文献についてだけ論じる。
- ii あの時期は原爆に関する文献の翻訳の豊かな時期であった。
- iii Dari, Nepali, Urdu, Mongol, Tajik, Khmer, Burmese, Visayan
- iv Karl Bruckner “Sadako will leben”
- v Edita Morris “The Flowers of Hiroshima”
- vi Kazuo Ishiguro “A Pale View of Hills”
- vii Роман Николаевич Ким (Roman Nikolaevich Kim) ≫ Девушка из Хиросимы ≫

Abstract

Hiroshima and Nagasaki: A Multilingual Bibliography

Urszula Styczek

In this paper I am introducing our four-year effort to create a database on multilingual bibliography about Hiroshima and Nagasaki: about its genesis and other cooperators, purposes, construction. I am writing about some particular and rare languages in which some books have been translated. Finally, I am comparing the most translated Japanese writers into foreign languages with some foreign writers translated into Japanese and other foreign languages.